草原編 ③

モンゴル通信

2014年01月28日

NO.7

肉を食べるということ

ある朝、子どもと父親が羊と山羊の群れに向かって走っていきました。すぐに十分に太った一匹の山羊が捕まえられ、繋がれました。一体、何のため？それは、厳しい冬を越すため、収入のため、時に客人をもてなすため…遊牧民の生活に必要不可欠な家畜の“と殺”のためでした。

遊牧民に関わらず、モンゴルの家庭で食事をいただくとき『マハ、イデ。（肉を食べなさい。）ツァイ、オー。（お茶を飲みなさい。）』と、とにかく肉とミルクティーを勧められ、食べきるまで帰してもらえません。今回の“と殺”を前に、その理由が見えてきました。

山羊のボードク

山羊をゲルの側に連れてきて、かなづちで頭を二度たたき気絶させ、その後すぐに絶命させると30分もかけずに解体していきました。その間、大地に一滴の血も落とすことはありませんでした。内蔵も全て食します。コロコロとした便を取り出し洗った腸は、血を詰つめたソーセージになりました。

その後、解体された山羊の皮の中に、その肉と骨、焼いた石、じゃがいも、たまねぎ、塩を順番に詰めて、皮を焼いて蒸し焼きにすること１時間。鍋がなかった時代の古い調理法を伝えているといわれる“山羊のボードク”という豪快な料理が出来上がりました。

全てを見、全てを食す

『食べるよ！』と呼ばれて行くと、既にゲルの中は山羊のボードクを囲む人でいっぱい。近くの（といっても目に見える距離にはない）ゲルの人や親戚、友人を呼んで、大勢で分け合って食べます。

お腹を開いて最初に渡されたのは、中に入っていたアツアツの石。（この石を患部に当てると治癒が早まると言われています。）皆が手の中で石を転がしている間に、肉とジャガイモが取り出され、茶碗に肉汁が集められ、皮も大きく切られていきました。

老若男女が山羊のボードクを囲み、手づかみで肉や皮を食べる。骨付き肉は、骨が真っ白になるまで食べる。３歳の子どもも自分の腕程ある肉や皮を食べる。肉以外のものを食べるなんてとんでもないと言わんばかりにひたすら肉を食べる。『これは一番おいしいものだから、皆で少しずつ食べるんだ。』と回されたのは、肉汁の入った茶碗と大きく広い骨についた肉。“塩だけでこんな味になるの!?”と驚きの美味しさ。草が良いため、肉も美味しくなるそうです。この草原は、ネギのような良い香りが漂うところでした。

骨の髄まで肉を食べ、どこまでも乳を加工するモンゴルの人は、肉や乳に対して貪欲だなあと思っていました。しかし今回のゲル訪問を通して、それはむしろ謙虚さや感謝の心から来るものだということが分かりました。肉を食べるということは、育てた家畜を殺すということ。その全てを見、全てを食し、皆で分け合う姿は、自分たちが育てた家畜を食べものに変えた責任を果たしているかのようでした。だからこそ、家畜を殺さずに得られる乳に対する思いも強く、何一つムダにしないのでしょう。この精神は、この国に暮らす全ての人の中に刻み込まれているものだと思いました。

私は日本で、自分の手で育てることなく、生き物が食べ物に変わるときを自分の目で見ることなく、食肉化されたものを手に取り食べてきました。肉に限ったことではありませんのが、そのいのちをもらっているということに余りにも無頓着だったことに気がつきました。モンゴルの人の精神に尊敬を覚え、食べるということを学び、この土地のものをより美味しく大切に感じるようになりました。

草原のこども

二人の子どもと草原で過ごし、ボールのように草原を跳ね回って遊ぶ姿に逞しさを感じ、当たり前に両親の手伝いをする姿に感心させられました。ゲルの中をほうきで掃除したり、馬糞の燃料を取りにいったり、お茶碗を洗ったり、牛を追ったり、羊と山羊の群れを水飲み場に促したり、山羊のと殺をじっと見守ったり。

1990年、モンゴルは社会主義体制から市場経済への移行を始めました。家畜の私有化に伴い、より良い収入を求めて、遊牧の手伝いのために子どもを学校に通わせない家庭が増えたそうです。ほぼ100%近くあった初等教育就学率は、約 70%まで落ちました。私も実際に二人の子どもの働きっぷりを見て、そう判断してしまう親もいただろう、と思いました。初中等教育費が無料のまま維持されたことや、児童労働や教育に対する取り組みにより、現在は高水準に戻りつつあります。

多くの遊牧民の子どもは、家族のバイク等の送り迎えで村の小学校に通っているそうです。しかし、村には中学・高校がないため、小学校卒業後は街の学校の寮に入ることになります。その費用が個人負担であることや、子どもの数に対して寮が少ないため、就学困難な家庭も多いと聞きます。

今回出会った、よく遊び、よく手伝い、多くの子どもによって使い古された教科書でよく学ぶ草原の子どもたち。その“学びたい・出会いたい”思いがずっと守られるようにと願うのでした。（冨井愛）